



横河
秋濤
著述

開化の入口二編

上

71
3481
1



Meixisinpan.

橫河秋濤著述

關化乃入

長谷川貞信画

部數無

松邑文海堂梓

二月廿三日購求

相之海在工

一級之理亦一

的人情清者

門ヲ1
號3481
卷1



紅粉とて心ふ
 芳人若くは
 鶴水歌歌

横河秋濤述
 開化の入口卷三

播陽 横河秋濤 述

安樂院鈍念 三人コレハく文太郎様との後ハ

古田頑山 打絶す〜とゴヤット御成人トヤ

玉垣間狭 シシ兼て爺様の話〜ヤヨ

は御一新後又々関東へ御修業ウシシ今日ハ

我々も小学校の相談よ来て圖らハ御雑作よ

有る事トヤサテく スツト空へ坐らるるソシテ此言
筋トヤ中だ一人も見ぬ西洋風ドフモ毛寒ふて
恐とい者トヤソシ

文 ハイ先改曆皆様御安泰で日出度存ま
は扱僕もかゝる開明進歩の御時節小生を
なづら遅川と云苗字ハ何まり愚太夫ごら
まご親共不披露も致さるゝ此度開化文
明と改名を致しませう ドウカ以来左様御

呼くごさいますせう

英 ハイ私共は西海英吉と申す文明君と
い兄弟同様の間柄でマイマを御見知り置
れと下さいますせう

鈍 成程兄弟同様と仰まは御主が兄貴と見
へ升すソシ甚だ失敬トヤが持合をの蓋受て
下せらるかト英吉先より聞て居まは御主ハヤツ
ト辨者トヤノウ律義一偏の區長殿を段とと

説つけてトウドウ魔道へ引込ん〜トヤが我く
ち中々承知づ出来ぬ金体牛を食事が人間
第一の養生トヤと云んたが殺生成戒と云事ハ五
戒の中でも一番罪障が深い又支那の聖人乃
教も閻其聲不忍食其肉ともあり其上牛と
云者ハ田地を犁て耕作を助け荷物を負て
人力が省き藁をふんで糞土を補ひ農家有
要の道具トヤケイ百姓衆が牛王と崇めて祭

て居る夫を残忍〜打殺〜煮て喰〜扱
も〜恐〜根性よ成〜のトヤ日本の穢多
どもども其牛が病死〜り又ハ年が寄て役よ立
ぬゆ〜るる〜ゆが中〜若イ牛を打殺す事滅
多よせぬトヤの彼の西洋人の慈悲も情もあは
者トヤノンシ
英 サア〜其殺生成戒どの罪障どのと御前様
が〜つ〜る〜事云囉〜風も殺〜

が如來の本願ごとと表看板を張かりしてこの
皇國の民風は様々下凡下劣と成ましく
ノサ彼の聖人の教も君子の遠庖厨と云て
有ませんのををまきいお前様のやうに喰ふと云
訣でい有りませんノサ肉食の天下は有要なる
訣の中々一朝一夕の論でい有ませんの先刻御
老人云ひ残しと功徳を一ツニツ云ウて写せ
まをうら全体に化の間は生ある物を一ウは

て禽獸を温血物と云ひ虫魚を冷血物と云
ますノサ乃て人間は其中の大將が矢張温血物
の中は有ませよその温血物の為より矢張同類
の禽獸が一番で彼の血の冷い魚類は第二番
の滋糧物として居ませ事サ是等の道理を知
らまきてい述ても御話の合ちいノサ肉食と云
へ云へは狐狸或犬馬でも喰様と思ウてやとら
悪食を自慢らうくすら白痴漢の多く有ふ

は甚ど困る人の食物の爲に天より具つてなる者、牛羊家猪家鴨兎鶏の外何も如何者食をせらるゝ及なをあるノサ其上西洋より牧畜場とソつて上古より牛羊豚を澤山つくる産業があつてその肉は割烹炮炙或は「カシ」して食物となり乳汁は灌酥酪或は抄す「さま」の佛法でも醍醐と云つて飲料又は「医薬」となり脂肪を以て石礆或は膏藥食物又蒸氣の機械を

を滋し毛皮骨角を以て種々の衣服道具を製する且又第一萬民の利益と成る事、此を年々作りやるとは彼らの五穀と違つて、亦不作と云事、いふは凶年飢饉の厄難を免むる大妙法、乃て此度皇國にも此業を由開き遊むせぬ万民の憂苦を救へせらるゝとの御趣意、ごころやるとドウダお寺さん、それども彼是僻説の出せし子イ

鈍^ツサ^クく^クその^ク万^ク民^クの^ク憂^ク苦^クを^ク救^クへ^クと^クせ^クん^クと^クは
御^ク趣^ク意^クが^ク下^クの^ク大^ク難^ク義^クを^クま^クづ^ク僧^ク侶^ク一^ク般^クの^ク迷^ク
惑^クハ^ク扱^ク置^クき^ク此^ク頃^ク徴^ク兵^クと^クや^クら^ク血^ク税^クと^クや^クら^クと^クせ^ク
大^ク切^クな^ク人^クの^ク子^クを^ク折^ク角^ク兩^ク親^クの^ク辛^ク苦^ク艱^ク難^クを^ク盡^ク
一^ク尿^ク屎^クの^ク世^ク話^クを^ク手^ク習^クひ^ク美^ク盤^クを^クと^クり^クに^ク就^ク音^ク
古^クき^クを^クと^クせ^クと^クせ^クと^クら^ク些^ク一^ク家^ク業^クの^ク役^クも^ク立^ク様^クり
成^クる^クの^クを^ク十^ク七^ク支^ク或^クハ^ク二^ク十^ク支^クより^ク引^ク上^クて^クギ^クヤ^クツ
と^ク生^クき^クて^クと^クら^ク夢^クも^ク知^クら^クぬ^ク軍^クの^ク誓^ク古^クを^クや^クせ

体^クが^ク達^ク者^クで^クと^クら^ク役^クも^ク立^ク者^クハ^ク直^ク様^ク朝^ク鮮^ク征^ク
伐^クに^ク遣^クり^ク体^クが^ク弱^クう^クて^ク役^クも^ク立^クぬ^ク者^クは^ク血^ク税^クと^クや^クら
云^クて^ク血^ク液^クを^ク絞^クり^ク毛^ク氈^ク羅^ク紗^ク握^ク々^ク緋^クを^ク染^クると^クや
ら^ク云^ク事^ク志^クや^クホ^クン^クニ^ク前^クも^ク云^クと^ク通^クり^ク達^ク者^クを^ク牛^クを
打^ク殺^クして^ク炙^クて^ク喰^クふ^ク位^クハ^クお^クろ^クの^ク系^ク事^クト^クや^ク萬^ク物^ク
の^ク長^クと^クら^ク人^ク間^クを^ク苦^クし^クめて^ク諸^ク商^ク賣^クの^ク税^クを^クと^クり^ク士^ク
族^クの^ク家^ク録^クや^ク官^ク負^ク月^ク給^クの^ク税^ク迄^クも^ク取^クり^ク上^クて^クと^クれ^クで
も^ク飽^クた^クら^クず^ク終^クる^ク萬^ク民^クの^ク家^ク督^ク相^ク續^クの^ク為^クめ^ク辛

苦を盡し〜若者の血液を絞つて税を〜と
はホンニ阿脩羅の地獄とは此事で〜成程
関東や九州は百姓一揆が起つと苦もや観音薩
埵が大慈大悲の眼くら見〜最早世
界も泥の海と成と様に思をまけるノンシ

愚 エヘン〜扱皆様御着も〜ぬが遠慮
ちく上られイ今日イ久〜悴共も帰りま
〜が上方筋ハ最早彼の通り西洋人風が

深込で前刻より段々西海氏の議論を聞ば成
程一チ言も〜ぬが御一新以來諸國の騷動が
〜治中〜治ま〜ぬ中小ハヤ宮や寺の御
主朱黒印を引上げられ境内の穿鑿〜山
林の改め其中〜向けて地券の書上〜戸籍の調
〜雑税の取立〜年貢の世話扱々従前の御政事
〜は大き〜違ひ片端〜風の子を潰す〜小
迹〜〜縣廳の催促戸長も伍長も手慣ま

ぬ事^ニ晝夜^ノの苦勞^ト扱^ク苦^シひの^ハ遇^フふこと^トトヤ
其中^ニでも學校^ノの會計^トと此度^ニ徴兵^ノの催促^トま^ハさ
づわり困^ルる^ハンシ全体^ノ御上様^ハハナゼ此様^ノ下^ニ
の否^ハづる事^ヲ考^テ重箱^ノの隅^ヲを箸^ヲでせ^ルる
やうみ^ハ嘩^シう^ク云^フら^ハあ^らう^ウ今上^ノ
人の言^ハまる通り^ノ町人^ノ百姓^ノの子^ヲを迫^リ出^シて
是^レを^モて^モ夢^ヲも^も覚^メぬ^ハ軍役^ノの人^ノ足^ハ取^ラれ
ると^ハ事^ハホシ^ク無^ク体^ハ事^トヤ^ハ己^ノ等^ノ考^テ

い矢張^ハ今迄^ノ在来^ノの諸藩^ノの士族^ヲを使^フて^ハな
能^ハ事^ハ有^ラず^ハい^ハナント英吉^ガん此返答^ハな
ドヤ^ノウ

英^ニイヤモウ文明^ノ君^ノ関東^ノ筋^ハ頑愚^ナと云^ツても
下^ニこの者^ヲ斗^ウで寺^ノの和尚^ヤ區長^ヲも見立^ラれ
る位^ノの人^ハ大分^ノ開^テ居^ル者^トかドウモ西京^ノ
ら下筋^ハハサリ話^ヲ成^チい^ハ子^ハ君^ハ憫^ミま^シ前^ノら
一言^も出^スる^ハい^ハづ^トウ^ダキ^ト僕^ハ代^リで^ハ即^チ今^ノ天朝^ニ

急きゆうの御用ごようどらり御老人ごらうじんやお寺様てらさま先づまづ徴兵ていへいは
講譯かうやくを少すくし奉り御間ごまセナサイ

文ぶん サア僕わがも先刻さうまき門口もんぐちを這入こる時ときうら犬いぬが
吠わいり「フアーサー」や「マアサー」が昔流あふりの愚論ぐろんは壓あ
倒たふされそ一いち言ごも出であへ、サ實じつは前まよりうら君きみが
段々だんだんの辨解べんかいで漸しだく強迫きやうはくで開ひらけて来き中ちゆうと志し
うら此こうら僕わがが訥辨とつべんで少すくし奉り喋りしゃべりやせう
抑徴兵よくていへいと云事いふことは上うら御一人ごひとりの天子様てんしさまが下万民かばんじんの

中ちゆううら御國ごくにを保たもち護まもらんとの兵ついでを徴のし出でせらる
る云事いふことで實じつは國家こくがの大典たいてん緊急きんきゆう第一だいいちの御用ごようは
して何なにも御上ごじやう様さま奉りたの為ためでいふあくて万民ばんじん銘めいこ
共ともの財寶ざいほうや家いえや田地てんぢを大切たいせつに守まもる為ための御用心ごよしん
彼徴兵かていへい令れいの發端はつたんは恐おそき事ことも今上いまじやう皇帝てんたい様さま
の敕言ちうごんが紅摺べいそくよりして書かて有ありまは其敕言そのちうごんよ曰い
天下てんかハ天下てんかの天下てんかよりして朕一人ちんひとりの天下てんかよりしてす
下しもも萬民ばんじんと並ならひ立て俱ともよ共ともは國家こくがの安寧あんねいを

守らんと欲す若し亂臣賊子ありて下民を戕
ふ事ゆくハ朕を助けて其賊を誅伐せよと有り
まはしナサント有難い御主意でふありません
上古の歴史を見るサイ神武天皇を始め奉り
景行帝の西伐日本武尊の東伐仲哀帝神功皇
后の三韓征伐其外中古迄ハ天子親ら斧鉞を取
り玉ひ万民を引牽て毎々御出馬の有つと事
ど其間ハ日本も小國ながら亞細亞の強國

て御威光も海外も輝し其後臣下が御上様を
輕しめて權威を奪ひ驕奢も長し元來弓箭干
戈旗物具ホの軍道具ハ大内の兵庫よ収めてスハ
國家の大事と云べきと知諸國よ徴兵の令ダ
下り出陣の時其武器を銘こよ御渡し遊され
凱陣の時又是れを兵庫よ蔵めり筈の者あり
しを諸國よ武家よの武士よのと云りのが逐々
出来て天子より御免も有銘と手細工は武官

を作り我身勝手よ人の國を責取り犬と猿
との喧嘩の商賣の様よ成て終る腰よ刀を
横とく近古の武家と云者が出来とノサ夫ら
大名小名或ハ旗元御家人直臣陪臣一文上りの
世界と成て天津日嗣萬國よ類ひなき一脉
連綿の天孫を押龍奉り我身を立て他人衣
侮り高の去れど國主大名の家老位が三万五
万の知行を押領し益々驕奢よ長ドて後には

自分と同勤の陪臣なる平士の顔を見知らぬ
申すよ成とノサ何分徳川氏二百餘年の太平が
大毒と成て其武家ヤ武士ハ皆尸位素餐將
軍家ハ上様の御稱號を押領し大名は御所
様どの屋形様どのと僭上り假初の御出門も
警唱の声四方よ曳き御先道具の大鳥毛玉轎
珠簾よ紫の厚房永く二百餘年の間終る一度
も戦争の實効も見えず若殿ハ敷賀の新内が御

上手で姫君は常盤津清元御守殿の御狂言といひ
つゝ何時も歌舞岐芝居の真似をなす甲うな情
ちい御時節と成とりのごと其れごうり明和安
永の頃より己よ異國の追く盛よ成て蒸氣船
の如き便利な道具を發明し海外萬里を軒
隣りへ行様よ開化して居る事ハ夢更まら
ず終つは嘉永年中僅四艘の亞米利加船よ老
耄の彼理一人が乗て來て彼天子様の真似をし

て大日本の全權を掌握しし將軍家も玉轎珠
簾の大諸候も三戈の小児の如く取扱を惜く不
三幹征伐以來弘安の蒙古慶長の朝鮮大明海
外ハ武威赫耀しし皇國の武家がトウドウ腰を
稜ししノサ乃で此度御一新の御政治と改り上
古神武景行の御代の如く將軍家を始め諸國
の武家や武士の様を遊び暮して大祿を貪り
下萬民を苦めて長い刀を横しし人このやう

不贅物をさらなり御廢止と相成り今日日傭働
 たる下賤なる百姓のら穢多非人迄も武士と同
 様は苗字を名乗らば頭を断髪して福高袴
 は割羽織手足の仕業は假令糞土を荷ぎ牛馬
 の尻を拭ふとも心は天子直叅の武士同様小
 何時でも國家の大事有る時は粉骨碎身して
 御上様の御為にならるる偶人間も生きて
 て皇國の御民と呼ぶる甲斐はなほノサそれ

よ何ぞや二百餘年徳川家の悪風義が染びん
 び同一様は頭身手足の具つゝる人間を公家
 大名百姓町人穢多非人等と九ノ梯子を見
 様は段を付するものぞら其れが上下一般の風俗
 と為りイヤ巳ハ百姓のら糞持や草取をして
 へ居まゐ十分どイヤ巳ハ町人ぞら腰は墨坪
 をきして美盤を爪操り人の眼玉を引被不
 ど酷迫よきくゆけハ先祖の家業ハ安全ごと

鼻の先の知恵斗り奮てホンニ大閣秀吉公ヤ徳
川元公の様よ微賤より起つて天下の政治を
手の内の團子の如く自由自在なる身分
と成られる事を知らぬ様な人物斗りの大
造多く成とノサ古歌よ植て見よ花の育ぬ
里もちろ心くろくそ身賤しけれ實よ人
間の一生は皆此通りと糞持をすり男も今
日縣廳の令参事も矢張小児の時いろはの

ら手習を始とのサ畢竟其人の志の厚いと薄
いと其育方の善と悪いと小據事ど茲よ一箇
の談話の在やすくく一々れど序よ御話申ヤ
せり或る田舎の畑の片端よ栖居して居る蟻
の秋の末つ頃其邊りよ撒れて居る粟粟の子
を穴の中へ澤山よ喰へ込で何時りのごとく冬
籠りを致し申たが翌年の夏よ及ひ其澤山
を食物が追くと之しく成り外へ出て食物

を求めんと穴の口へ来て見まへ大造ちる木の
 根が其の穴の口へつづつと蟠り直は外へ出る事も
 叶はず多き胆を潰し友達を呼集め種々様
 マカを盡し漸く入りて穴の外へ出て見まへ
 大きな根が八方へ跨り一本の大木天を突て
 の延び上り枝葉鬱然として空を掩ひ梢は紅
 白大輪の花を開き其麗しく盛ちる事怪む
 は堪へり因て隣りの穴へ栖居する蟻は其子

細を問ふと答曰此は昨秋汝が仲間の中へ穴
 の口まで来て一粒遺れ置けり故我こそ寄集り
 上を掩ふて埋め置けり春の頃より追くは延
 上り終は彼様ちる大木とは成り扱も天地の
 御細工で此世へ生を受くる者皆此通り始は
 人の目よりうらぬ中なる墾粟粒でも育方が
 能て手入さるれば蟻のひつくりをり様な大
 木と成て麗しい花も咲く様は成りませりサ

己ハ百姓の子どろくとも軍の真似ヤ文字を讀
 事は出来ナイと十人并ニ勝まゝの壯健な体
 或持ちがらゝのあゝ明後日ハ縣廳へ出て一等軍
 醫の診察を受け兵部大丞の検査を受ちり
 てハ濟まナイと區長殿のら呼ばれ來まハソヤ
 軍役よとろくゆる血を絞らまゝる時刻の來くと
 一家一門隣りの婆婢下村中が寄集り彼昔
 物語よ一人女が人身御供よ上る様は祖父が

腰を抜ちやう母親が積氣を起し目眩に
 やり死に行者うなんぞのやうな村中の老若男
 女の見送ちがら潜こゝと泣もあり或ハ検査の
 定日よ到り俄に本人が脱走して戸長や伍長
 の大迷惑とちりも有り或ハ常備と國民隊の
 差別を知らず長男を引出さん大さよ當惑
 して歎願を出すも有りイヤハヤ下凡下劣の民
 風どろく開化しナイも無理なうねどドウモ氣

の毒なりのおと子イこまは區長殿の諭方宜
敷無ひの事の事事で實は大切なる事件でござる
愚成程々々徴兵とは御上様より兵を徴し
出きりくと云事のウ扱又血税と云事ハ矢張下
々の云通り血液を絞らると云事ウニンシ

文 サア血税とい西洋よこれヲブルウトデキスと申
しまして先刻も申しと通り此世界の萬國ハ
皆天神の御細工で出来ぬものござる其國よ住で

居る人畜草木ハ皆其神様の御子同様天子を
其中の御頭で所謂天下ハ天下の天下より上
下一般の人物の寄合て折角神様の御骨折で
結構よ仕上げたる國体を無事安寧よ保護を
この今日天理人道の大眼目で在まほ況てや
帝國大日本ハ皇統一脉萬國無類の御國柄で
ウイますすら尚更大切よ護らちくといちから
以て名有ますんり萬一異國と兵端を開くのみ又

は内國よ逆賊ギャクゾクが起おこつて國体を害がいするやうな
 事が有るときは天子親みかどくし斧鉞ふせんを執とらて御出ごしゅ
 馬うまが在ありませす、サ其時そのときは假令たとひ四十戈迄よその男おとこハ唾あ
 聲こゑ少すくく病氣持びやうきもちてもせよ身幹みのみハ五尺一寸ごせきいちじゆよ足ある
 くても我劣われせうらうと天子を守まもり御馬前ごまへよ立塞たてせき
 ぐり敵てきと引組ひきぐみで華はなく敷討死しぢうしを志こころするくは
 彼御細工人かのごさいごじんの神様かみさまへ申訣まうけつの立たをいりら天理
 人道じんどうも叶かなはぬ乃すなはち萬民ばんみんが血ちを以もつて税ぜいを勤と

めるとしふ事でありませよ此こゝを名なけて國民
 隊たいと云い此こゝハ國中こくちゆう一体いつたいの民たみが非常ひじょうの御時ごとき節せつ小
 御上様ごじやうさまの御手傳ごてでんをすゝ事ことで畢竟いっせき國くにの為ためよ
 萬民ばんみん平日へいじつの心得こころえ方かたどうら檢査けんさもつしず又鎮ちん
 臺たいへ行いくも及およぶ然しかし男おとことる者ものハ十六戈じゅうろくごの冬ふゆ
 十一月じゅういちがつよ成なる時ときハ是非ぜいひ共とも戸長こへ私共わがとも來年らいねん彌や十
 七戈じゅうしちごよ成なると云い事を届とどめたる濟たすめぬ其
 上國民隊じやうこくみんたいの兵籍へいせきよ加くへらると云い事ことサドウカ面倒めんたう

な者ものが愚痴ぐち文盲ぶんもうの下したへは成丈なりぢ委敷くわいし諭うり
て御遣おんぢりなせへ是こねが第一だいいち天朝てんてうへは御奉ごほう公こうで
有ありやせり

冥化めいけ結けつ入にゅう口こう卷まき三さん

